OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「第1回大阪大学医学部保健学科看護学専攻助産コース夏期国際研修」を企画して
Author(s)	山地, 建ニ
Citation	大阪大学看護学雑誌. 1998, 4(1), p. 64-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56751
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「第1回大阪大学医学部保健学科看護学専攻助産コース夏期国際研修」を企画して

山 地 建 二*

①平成7年10月

Singaporeで開催された第12回Asia Pacific Cancer Conferenceに参加した折りに、思いがけず旧知のDr. Somboonと再会した。昔話に花を咲かせているうちに、彼が現在、在職しているMahidol大学Siriraj病院(Bangkok, Thailand）では、年間18,000件の分娩を取り扱っていることを聞き及んだ。単純平均すると1カ月1,500件、1日50件の分娩ということになる。ちなみに阪大病院の分娩数は1カ月約40件であり、まさに想像を絶する分娩数であった。一体全体、どの様な施設で、どの様な方法で、何人のスタッフで取り扱っているのか？……どうしても自分の目で確かめてみたいという思いに駆られた。Dr. Somboonにその旨を話すと、「ぜひ一度、Siriraj病院に見学にいらっしゃい。」と快諾をいただいた。「必ず機会をみつけて伺いますから、その節はよろしくお願いします。」と依頼して帰国した。

②平成8年4月

日本学術振興会の拠点大学方式による学術交流事業の一環として、東南アジア諸国派遣研究員の募集が目に止まった。Dr. Somboonと相談の上「タイ王国における母子保健医療と助産婦の活動」という研究課題を申請したところ、幸運にも採用され、昨年来の思いが実現することになった。折しも来年度からスタートする助産コースについて、あれこれ思案していた時期であったので、1日50件の分娩取扱いの状況を何とか助産コースの学生が見学できるようにきっかけを作りたいと考え始めていた。

③平成8年8月

初めて目にするSiriraj病院の陣痛室・分娩室は壮観だった。簡単なカーテンの間仕切りだけで、うなぎの寝床状に並んだ分娩台……砕石位でいきんでいる産婦がいるかと思えば、分娩が終了して会陰裂傷の縫合をうけている産婦がいる。胎胞が排臨していて胎児娩出の間近い産婦、陣痛室からストレッチャーで移送中の産婦などなど。改めて助産コースの学生にとって絶好の見学場所であるという思いを強くした。

感染症対策を課題として同行された土肥義胤教授の査察の結果、Siriraj病院産科外来ではエイズを始めとするウイルス性感染症のスクリーニングシステムが確立されていること、感染症を有する産婦の陣痛室・分娩室が完全に隔離されていることが判明した。助産コースの学生が通常の陣痛室・分娩室へ立ち入る分には安全であるとのお墨付きをいただいた。そこで勇躍、Dr. Somboonに助産コースの学生の見学実習について申し入れると、「産科婦人科学講座主任教授および看護学部長の許可が必要なので、前者については許可をもらえるように取り計らってあげましょう。後者については紹介するから直接交渉して下さい。私もサポートしますから。」と極めて協力的な返事をいただいた。

Mahidol大学看護学部の学舎はSiriraj病院に隣接し、チャオプラヤ河をのぞむ14階建ての高層ビルで、図書館・博物館・食堂を備え、留学生用の研修室・リサーチセンター・広大なLRCなど羨望の的となる様な施設であった。

タイ王国における看護教育の発祥の地であり、1896年に教育が開始されている。博物館に展示されている往時のユニホームや器械、写真などのコレクションはその歴史を雄弁に物語っているように思えた。さらに驚かされ

*大阪大学医学部保健学科看護学専攻母性・小児看護学講座

たのは、4年制大学教育が既に1956年に確立されており、1972年には医学部から独立して看護学部となり、1977年には修士課程、1989年には博士課程が誕生していることであった。目から鱗の落ちる思いであった。重厚な大会議室には歴代看護学部長の写真が掲げられていたが、初代および第2代の学部長は米国人であった。当時のタイ王国の看護教育にかける意気込みを感じさせる立ち上げである。

現看護学部長 Tassana Boontong 博士はタイ王国看護協会長を兼任され、超多忙な女性との事前知識を得ていたが、快く面会に応じ、私の意図するところを即刻察知して歓迎の意を表して下さった。

Mahidol 大学とは大学間協定の準備を進めている時期でもあり、事務的折衝のため霜野壽弘専門員の同行をいただき、スムーズに話を進めることができた。

帰国後さっそく準備にとりかかり、数度にわたる手紙・FAXのやりとり、試行錯誤を経て、助産コース学生13名、助産コース以外の4年次生3名、母性・小児看護学講座中嶋有加里助手、産科婦人科学講座　東千尋、光田信明、大橋一友講師と私の総勢21名で「第1回大阪大学医学部保健学科看護学専攻助産コース夏期国際研修」に臨んだ。

④平成9年7月26日

関西空港5時30分発のタイ国際航空775便で出発した。Bangkok 到着後に知ったことだが、この日は台風9号が関西地方を直撃し、関空を離陸出来たのは私達の乗った1便だけだった。早朝の出発が幸いした。

研修日程の概略は表1に示したとおりである。Mahidol 大学での研修スケジュールは母性看護学講座のスタッフがきめ細かく配慮して作成して下さった（表2）。

この期間、日本の学年暦とは異なって、Mahidol 大学は休暇中ではなかったが、多数のスタッフが授業・実習のあい間をぬって協力して下さった。心から感謝の意を表したい。

表1　研修日程の概略

Date	Visiting Site	Remarks
7／26	Royal Grand Palace, e.t.c.	Kansai International Airport 5:30 departure Don Muang International Airport 9:00 arrival Stay at Montien Hotel
27	Ayutthaya Province	Bangkok → Ayutthaya Province (river cruise) Ayutthaya Province → Bangkok (bus tour) Stay at Montien Hotel
28	Mahidol University	Stay at Montien Hotel
29	Mahidol University	Stay at Montien Hotel
30	Mahidol University	Stay at Montien Hotel
31	Cha-Am Beach	Bangkok → Cha-Am Beach (bus tour) Stay at Cha-Am Long Beach Hotel
8／1	Cha-Am Beach	Cha-Am Beach → Bangkok (bus tour) Stay at Montien Hotel
2	Free time	Don Muang International Airport 23:59 departure Kansai International Airport 7:30 (8/3) arrival

表２　Mahidol 大学研修スケジュール

Date		Group Ⅰ	Group Ⅱ
Jul.28	AM	Meet Dean, Head Department and Staff. Study tour at Faculty of Nursing	
	PM	Labor Ward	Postpartum Ward
Jul.29	AM	Antenatal Clinic	Labor Ward
	PM	Postpartum Ward	Labor Ward
Jul.30	AM	Labor Ward	
	PM	Discussion and evaluation	

⑤学生のコメント

全日程を終了した後の助産コース学生13名のコメントは次のとおりである。

・**石橋真理子**：日本と比べてHIVの感染予防に関して十分な保健指導がなされていると感じた。また日本と違って妊婦間に貧富の差があったが、国立病院に入院することで同等の医療が受けられるようになっており、母児へのやさしい医療環境が伺えた。できれば日本同様、退院後も継続看護を行い、母児共の身体・精神面のフォローを行えていたらと思った。

・**大濱美香**：タイでの助産方法や健康指導など何も知らずに参加しました。ほぼ、基本的な考え方は同じであったのに、１つだけ驚いたのは、産後に腹部を温めるという点でした。そして何よりも規模が大きいことに驚きました。分娩室がつらつらと並んでいるのはすごいながめでした。また、これは日本でも同じですが、助産婦は自分の仕事に対してすごく誇りを持っているな、という印象を受けました。国は違っても基本的な考え方は同じだな、と実感できる研修でした。

・**川島永味**：助産の実習も始まる前だったので分娩に対する知識等も一般人並みしかもっていないまま研修に参加してしまいました。タイの街並み・文化に触れて、雰囲気にのまれながら病院に行き、そこでも患者数の多さには驚かされました。助産婦業務の博物館や人体の解剖の博物館などの見学も興味深いものでした。この研修を通してタイの名所や食べ物などにも触れることができてとてもよい経験ができたと思います。

・**小松真樹子**：まず驚かされたのは出産数の多さだった。分娩室・陣痛室が満杯で次々に赤ちゃんが産まれていく様は圧巻だった。外来で、集団指導の乳房管理、タイで問題となっているエイズ教育などが徹底されており、これは見習わなければならないところだと感じた。看護教育の面も、アメリカ式をとっているからか日本よりはるかに“看護”が独立したものとなっており、働いてからさらに上の勉強をすることへの門も開かれているような気がした。

・**高田佳恵**：病院では、妊婦さんのベッドサイドで話しかけたりさすったりする様子がとても家庭的な雰囲気があると思った。医療者と妊婦ではなく個人対個人という感じを受けた。文化、生活環境に違いはあるが、助産に関しては万国共通だと思った。

・**高柳香里**：私がこの研修で印象に残ったのは、病院の陣痛室・分娩室の大きさと人体の資料館でした。広い陣痛室に多くの産婦さんがおり、その数の多さに驚きました。また資料館では、見たことのない興味深い人体の資料を見学することができ、貴重な体験だったと思います。（タイの学生は、純粋で助産に対する熱意をもっており、きれいな人が多かったですヨ。）

・**竹内愛美**：私はタイの病院、また助産技術というものがどういうものかという知識を全く持たずに今回この研修に参加しました。病院の第一印象は、川沿いで緑あふれる解放的なところだな、というものでした。また３日間産婦人科病棟や歴史館の見学をする中で、文化や助産技術の違いに圧倒され、助産コースの学生とも会話をすることができ、自分自身にとってよい刺激を与えられたと思います。

・**福田和美**：私は、タイという国はどの様な国であるかを観光ガイドブック程度の知識しか持たずに今回の研修に参加しました。その国の慣習があって、日本と異なる点が細かいところであってもお産の基本は変わらないものだと実感しました。また、お産に関わる助産婦や医師、学生も熱心であり、自らの職業に誇りを持っているところも万国共通であると思いました。大変感動を覚え、良い刺激となった研修でした。

・**船越未瑳**：海外旅行が初めてだった私にとって、この研修旅行は何もかもが新鮮で刺激的でした。食事を含めてタイの文化や習慣を少し知ることができ、そして何といっても自分達と同じことを目標にして頑張っているタイの助産婦学生と触れ合えてとても勇気づけられました。肩凝りの私にとってはマッサージが最高でした。ほとんど毎日行ってたかな。

・**船橋　舞**：タイは二度目であったが、病院をじっくり見学したり説明を受けることができるなどできて良かった。また、タイの助産婦学生と会話でき親近感を

もった。タイは売春問題など大きいが、そんな領域でも助産婦が活躍できていたら、と思った。それにしても陣痛室の産婦さんの数の多さは圧巻であった。

・**松田かおり**：初めての海外で、ありとあらゆるものに目を奪われたが、マヒドン大学では様々な見学を通して、日本のようにCTGモニターによる監視ではなく、本当に助産婦が責任を持って自分の目と耳と手…と五感を使った診断のみであり、助産婦の役割・重要性を認識したと同時に自分もCTGとともに五感による診断を心がけようと強く感じた。

・**小川裕子**：日本でお産を見る機会もないままにタイの研修に参加し、次々と産まれてくる現状に感動と驚きで一杯でした。マヒドン大学における助産婦学生の保健指導や健康診査を行う姿は、助産婦が本来あるべき姿であり、MEに頼らず妊婦自身を見つめた姿であると思いました。

・**森本　恵**：タイの看護学生と接していて、カリキュラムが厳しいと同時に彼女達がとても熱心であるという印象を受けました。忙しい中でも一生懸命実習や自己学習に励んでいる姿を見て、私達も頑張らないと…と思ったものでした。マヒドン大学には看護の歴史を残した資料館や、人体の資料館などもあり、学生が看護や人間の体のしくみに興味をもち、学習しやすい環境だなと感じました。タイの料理、とてもおいしかったです。

⑥平成10年8月

第2回の研修を本年8月初旬に実施予定である。新たな気持ちでプランニングに取り組み、内容の充実とともにMahidol大学看護学部のスタッフ・学生との交流をより一層深めるよう努力したい。